

ノンクリスチャン保育者による キリスト教保育の可能性

深 谷 潤

Possibilities of Christian Early Childhood Education
by Non-Christians

Jun Fukaya

はじめに（キリスト教保育アンケート報告 2017年より）

一昔前までは、幼稚園と教会は一体のものであり、園で働く先生方は、保育だけでなく教会の奉仕も同時にしていました。多くの園では、日曜日にも午前の保育があったからです。けれども、今は教会と園は別の働きをそれぞれもっていて、そこで働く先生方も同じではありません。日曜日に保育を行う園は、今では極めて少ないと思います。また、経営に関しても、園児数の減少から教会附属の園が突然閉園に追い込まれた例もあります。園と教会の協調的な関係が難しくなっているのが今日の現状だと思います。

さて、10年に一度の割合で、キリスト教保育連盟が行っているアンケート報告があります。全国の夏期研修会に参加された保育者に大会中にアンケートを実施しています。また、その翌年秋に加盟園の園長向けのアンケートを郵送し、集計しています。それらの結果をまとめて、「キリスト教保育アンケート報告」を発行しています。最新のものは、2017年に発行された、第4回キリスト教保育アンケート報告（2013・2014年調査）です。保育者からは、738人から回答を得ました（回収率86.8%）。内訳は、幼稚園84.1%、保育園8.7%、子ども園5.6%、他1.4%に所属する保育者から回答を得ました。また、園長からは、493園から回答を得ました（回収率61.5%）。（内訳は幼稚園76.6%

(378 園)、保育園 23.3% (115 園) です。) そのアンケート結果を手がかりとして、本日のテーマについて、お話を始めたいと思います。

アンケートによりますと、回答をしてくれた保育者の内 64.1% がノンクリスチャンでした。そんなものか、と思われるかもしれませんが、さらに 10 年前の 2004 年調査では、ノンクリスチャンは 55.7% だったのです。つまり、10% 近くこの 10 年でノンクリスチャンの保育者の参加者が増えたこととなります。全国の研修会に参加する保育者は、ただでさえクリスチャンの保育者が多いと言われていますが、それでもノンクリスチャンが増えているのです。これは、「キリスト教保育の多くがノンクリスチャン保育者によって担われている」ことを数字の上でも裏付けていることでもあります。

他方、ノンクリスチャン保育者の 82.2% が教会の礼拝に出席しています。これは「時々も含め」た数ですが、ノンクリスチャンの保育者のまじめで誠実な態度が垣間見えます。ただ、実際には、そのうち 35% が義務的に出席している結果がでました。しかし、40% 以上が礼拝には意味があると感じています。礼拝が終わったときには、半分近くの保育者が「礼拝に来てよかった」と思っている、ということだと思えます。

また、キリスト教保育の特色についての問いでは、ノンクリスチャンの保育者は、キリスト教保育の特色は、「一人一人の存在や違いが大切にされる保育」であると感じる割合が最も高い結果がでました。(87.6%) 2 位は「いのちを大切にする保育」(53.1%) でした。さらに、キリスト教保育を志した理由の多くが、「キリスト教保育に共感するから」(38.8%) でした。さらに、20 歳代保育者の 40% 以上、キリスト教保育の場で「自分を活かせるから」と答えています。この若い保育者たちは、ノンクリスチャンが 88% 以上を占めています。つまり、ノンクリスチャンの保育者は、一般的な保育よりもキリスト教保育の中に、自分の保育者としての使命を見出してキリスト教保育者の道を選び、さらに教会の礼拝に出席してキリスト教保育の本質を学ぼうという姿勢があることが、このアンケート結果から分かるのです。

この講演の原稿を作成する際、改めてアンケート報告を分析してみると、若いノンクリスチャンの保育者たちが、懸命にキリスト教保育を学ぼう、いい保

育をしよう、と努力する姿が目には浮かびました。今治めぐみ幼稚園の園長先生のメールに、「ノンクリスチャンで保育を担っている教師たちに、もっと楽しく、やりがいのある職場となるため」どうしたらいいのか、と書かれてありました。キリスト教保育の場が「楽しく、やりがいのある」職場となっていない原因は何なのか、それを妨げる主な要因は何なのか、アンケートの自由記述欄にその一つを見つけました。そこには、こうあります。

「クリスチャンでは無いものが話をして良いのだろうかと思う。」

「聖書の意味が分からない。」

これは、礼拝に関する悩みの中にあつたものです。キリスト教保育の最も特徴的な部分であり、またその本質は、幼児礼拝です。クリスチャンとノンクリスチャン保育者の中で最も違いが出た部分に、キリスト教保育を「礼拝のある保育」、そして「保育者が祈りをもって行う保育」と見なすかどうかです。「遊びを大切にしている保育」や「世界や自然の中で生きることを大切にしている保育」、「一人一人の存在や違いが大切にされる保育」には大きな違いはありませんでした。

ここで、本日のテーマをまとめてみたいと思います。

ノンクリスチャンの保育者がキリスト教保育を実践していくうえでの主な課題は、幼児礼拝の持ち方です。それは、聖書をどのように理解し、信仰がないものが、子どもたちの前でどのように祈ったらよいか、という不安に主な原因があると考えます。このような疑問点や不安の解消は、本来、教会の牧師先生や園長先生の仕事であります。ただ、先生方に責任を押し付けるのでは、私がお話する意味はありませんので、あくまで一人の教育学者の意見として、これからの話をお聞きいただきたいと思います。

1. 西南学院舞鶴幼稚園園内研修会（2015年11月）より

最初のご紹介にもありましたが、私は勤務先の要請で、2005年から2011年

までの6年間、西南学院の系列幼稚園で園長をしておりました。もともとは大学教員ですので、授業の合間に園にいて、園長の業務をこなしておりました。多くのキリスト教系の学校でも似たような事情かもしれませんが、キリスト者でなければ、学校長にはなれないという規定があります。西南学院大学教職員の内、当時、クリスチャンは約3割でしたが、私の所属する学部の事情により、まだ就任2年目の私がいきなり園長に選ばれたのです。それ以前は、関西のキリスト教の短期大学で10年間キリスト教保育を教えておりましたが、管理職としての仕事は全く初めてで戸惑いました。しかも、幼稚園の多くの教員がノンクリスチャンです。私は若いころ教会で、教会学校の教師や聖歌隊、青年会とばりばり働いていましたが、幼稚園の園長をしてみて、ノンクリスチャンの先生方がもつ疑問や気づきに多くの刺激をうけました。園長の仕事を離れてしばらくしたのち、園内研修会の講師として、ノンクリスチャン保育者からの疑問にいろいろ答えてほしい、との要望が幼稚園からありました。キリスト教保育を行うにあたって、「ノンクリスチャンの教師としてどうあるべきか」という問いに答えてほしいというのです。他にも、子どもたちに聖書・賛美歌をどう伝えていくのか、日ごろ子どもたちがキリスト教に触れ、関心を持てるような働きかけはどのようにしたらいいのか、といったものでした。おそらく、先生方の多くも同じ様な疑問や悩みをお持ちだと思います。これらの問題を次の3点にまとめて答えていきたいと思います。

- ①ノンクリスチャンの教師としてどうあるべきか
- ②子どもたちに聖書をどう伝えていくのか
- ③日頃子どもたちがキリスト教に触れ、関心を持てるような働きかけをどのようにしたらいいのか。

①について、私は、逆に聞きたいのです。皆さんはどう考えているのでしょうか。私に答えを求め、それを参考に自分なりに考えていこうとしているのでしょうか。私は、舞鶴幼稚園の教師たちに、いきなりこのように問い返したのです。学生でもそうなのですが、いきなり模範解答が欲しい、という人が多いのです。失敗はしたくない。正しい答えを早く知りたい。テストであればそれでいいのかもしれませんが、自分の人生であり、仕事には、マニュアル通りに

ならないことが多いのです。ましてや、子ども、人間に関わる仕事であればなおさらです。私の知り合いの教師の話ですが、あるキリスト教系の幼稚園にノンクリスチャンのまま就職したそうです。その時、牧師であり、園長である先生から、「3年以内にクリスチャンになりなさい。」といわれたそうです。その先生は、クリスチャンにはならず、途中でその園をやめ、別の園の教師になりました。その牧師先生にとっては、「ノンクリスチャンとしてどうあるべきか」という疑問は、まずありえない、ということなのでしょう。クリスチャンになれば解決する、ということだと思います。昔の園は、それでよかったのかもしれませんが。ノンクリスチャンにはキリスト教保育はできない。だからクリスチャンになりなさい、でおしまいだったのです。先ほど触れましたように、6割以上の保育者がノンクリスチャンの実態があります。日本のキリスト教の園では、ノンクリスチャンによって大半の保育が担われているのです。クリスチャンになれば、では保育が成り立ちません。ノンクリスチャンでありながら、キリスト教保育をいかに実践していくのか、その答えを探さねばならないのです。

私の考えをここで述べたいと思います。クリスチャンになるのも確かに一つの究極的な選択肢ではありますが、ご存知の通り、クリスチャンになりさえすれば、キリスト教保育ができるようになるわけではありません。保育はそんなに甘くはないですね。クリスチャンになる前に、キリスト教の教えである、神を信じることそして人を愛すること、一人一人を大切にすること、そういった価値観や倫理観に共感し、それを追究し、実践しようとするればよいと思います。そのような人のことを、「キリスト教シンパ」と呼びます。「シンパ」とは、sympathy、すなわち共感です。

この「キリスト教シンパ」という言葉は私が勝手に作った言葉ではありません。いまから60年以上前、関西学院大学神学部の松村克己教授が彼の論文「宗教と教育：日本におけるキリスト教主義学校に関する神学的考察」（神学研究7巻 pp.373-402）の中で登場したのが最初です。そこでは、「キリスト教シンパ層」と表現されていますが、彼等・彼女らは「キリスト教並びに福音の真理に対して理解と同情をもち、その協力者となる者」と定義づけられています。

当時は、キリスト教教育を担うクリスチャンが多いため、ノンクリスチャンに圧力を生じさせないために、むしろクリスチャンを全体の3分の1に抑えた方がよいといった「キリスト者三分の一論」を唱えていました。今では信じられないことですね。ずいぶん恵まれた時代があったのだと思います。

キリスト教保育に共感して、キリスト教の園を職場に選んだ人たちも多くなることは、先のアンケート結果にもありました。ノンクリスチャンの先生方・保育者の皆さんは、すでにキリスト教シンパと言っていていいと思います。キリスト教の価値観、というと難しく聞こえますが、保育の中で、神様に祈る場面があると思います。信心深くなくても、自分以外の超越した存在に祈ることは、誰にでもあるでしょう。キリスト教の園では、それが天の神様なのです。人にやさしく、思いやりを持つことを大切にすることは、宗教と関係なくあると思います。キリスト教では、それが「隣人愛」と言われ、神によって造られた人間一人ひとりが大切にされ、愛されるべき存在である、だから、身近な人だけでなく、他人であっても困っていたら「人として」助け合うことが重要だ、と教えるのです。このような価値観は、教会の礼拝の中で、牧師先生の説教の中で様々な聖書の箇所を通じて伝えられます。だから、昔から教会に行くことが勧められてきたのです。教会にまじめに行き、洗礼を受けて教会に所属しなければ、正式な「クリスチャン」として認められません。明治から大正時代にかけて生き、無教会派をつくった内村鑑三（1861～1930）は、このようなまじめなクリスチャンを「教会クリスチャン」と呼びました。ご存知の通り、内村は、1924年の第一高等学校の始業式で、教育勅語に対してきちんと「奉拝」しなかった、つまりお辞儀をしなかったことで、国から非難されました。日本史で言ういわゆる「不敬事件」です。のちに、これは宗教的礼拝ではない、との理由から代理人に「敬礼」をしてもらったのですが、それがキリスト者としての態度としては、不徹底である、と逆にキリスト教会から批判されました。信仰をもちながらも、教会では「異端者」として非難されました。教会生活に挫折した彼は、別のグループをつくって信仰を守ったのです。無教会派をどう考えるかは、別のテーマになりますが、内村はクリスチャンであることには変わりありませんでした。しかし、教会生活を守る模範的な教会クリスチャン

であり続けることはできませんでした。

教会は「キリストのからだ」(エフェソ 1:23)である、と聖書は語ります。長い歴史を経て、教会には、法律や組織が整備され、制度となりました。その制度に入っていなければクリスチャンでは無い、という考え方が、内村のいう「教会クリスチャン」だと思います。彼ら・彼女らによって、キリスト教教育や保育を担ってきた時代はありました。けれども、今日の私たちの社会では、アンケート結果にも明らかなように、クリスチャンだけでキリスト教保育を担える時代では、すでになくなったのです。

補足ですが、「クリスチャン」という言葉は、聖書では、イエスの死と復活の後、ステファノの迫害があり、弟子たちが各地に逃亡しました。その一つアンティオキアにいた弟子たちが初めて「キリスト者」と呼ばれるようになった。(使徒 11:26)とあります。自分たちが進んでキリスト者と名乗ったわけではありません。教会の制度が整う前は、イエスの教えを守る者たちが、そう呼ばれていたということです。イエスの教えに共感できるのであれば、私はキリスト教シンパもそれと同じではないにしても、近いものではないかと思います。つまり、キリスト教の価値観や信仰に共感できるならば、私はキリスト教シンパとして、キリスト教保育の実践に関われると考えています。

2点目は、②子どもたちに聖書をどう伝えていくのか、です。聖書は旧約・新約聖書合わせて66の文書で構成され、すべてが子どもたちにとってふさわしいものばかりではありません。儀式的細かい規定や人の名前ばかりが羅列されているもの、難しい教えや預言書、残酷な描写など、大人が直接読んでも意味不明な箇所もあり、聖書だけ渡されてもどうしてよいかわからない、と困惑する先生方も少なくないでしょう。聖書を理解するには、歴史的な背景やイスラエルの民族・風土・文化に関する知識、さらに神学的な専門知識やヘブライ語・ギリシア語の語学の知識など、多様な学問的素養が求められます。ですから、牧師になるための専門的な教育を受けた人が、聖書のテキストを読み、解釈し、一般の人向けに分りやすく説明する必要があるのです。私は牧師ではありませんが、大学で教職課程をとり、中学・高校で宗教科を教える免許はとり

ました。それでも聖書を子どもたちにわかりやすく教えることはとても難しいと感じます。ましてや、専門学校・短期大学・大学で保育士や幼稚園教諭の免許資格を取得した皆さんは、聖書を教えることは専門外のことだと思います。どうしたらよいのでしょうか。昔なら、教会に行き、礼拝の説教をきいていれば、自然と分かるようになる、などと言われていたことでしょう。実際には、キリスト教保育連盟の機関紙「キリスト教保育」や、日本キリスト教団や他の教団が出版した教会学校教師向けの専門誌を読みながら、一生懸命自分なりに理解し、それでもわからないところは、ベテランのクリスチャンの先生や園長先生に質問し、さらに子ども向けの言葉に直して、リハーサルを繰り返し、はじめて子どもたちの前でお話する、というのが一般的ではないでしょうか。とても、そこまで準備することができません、という先生もいるかもしれませんね。紙芝居や聖話など、すでに完成されたものをそのまま使うしか、余裕がないという場合もあるでしょう。

どんなお話が乳幼児に適切なかは、キリスト教保育の専門誌にお任せするとして、私はここで申し上げたいのは、聖書のテキストそのものに、神様からのメッセージが含まれている部分がある、ということです。専門的な解釈や予備知識がなければ理解できない箇所もたくさんありますが、特にそれが必要でなくとも子どもたちに伝わるようなたとえ話には、そのような力がテキストに備わっていると思います。例えば、有名なよきサマリヤ人の話です。ご存知の通り、けがをした旅人を助けた親切なサマリヤ人の話（ルカ 10：25-37）です。私は、何度取り上げても、このたとえ話には、新しい発見があり、驚かされます。単に、けがをした人に親切にしましょう、ではなく、旅人とサマリヤ人は、歴史的に仲が悪いグループだったのに、サマリヤ人は助け、旅人の仲間であったユダヤ人の祭司やレビ人は無視したこと、さらにこのたとえ話は、律法学者の質問に対する痛切なイエスの批判であったことです。（隣人とはだれか、という模範解答を求めるのではなく、隣人になりなさい、という実践的な命令であったことです。）子どもたちの成長に合わせ、どのレベルまで説明したらよいのか、保育者もよく考えねばなりません。

もう一つの話は、これも有名な迷える 1 匹の羊の話（ルカ：15：4-7）です。

100匹の羊の内99匹を残して、見失った1匹を見つけ出すまで探し回することは、どう考えても不合理です。99匹に危険が及ぶことを考えなかったのでしょうか。一人一人を大切にしてくださる神様の愛が、ここには現れている、としばしば説明されます。確かにそうです。しかし、ここで問題なのは数の大きさではありません。99匹は正しい、まじめなきちんとした羊だったのに対して、迷子になった1匹は、「罪人」としてたとえられていました。つまり、神様の愛は、罪を持った人が悔い改めることに最も深く注がれるということです。「悔い改め」の概念は、幼児には難しく、罪を教えることも同じように難しいです。数や量では測れない、神様の深い愛の尺度がここに潜んでいます。これを直接子どもたちに理解させることは難しいでしょう。ただ、迷子になった羊の話を通して、数字には表れない価値の世界に触れさせることはできると思います。

このように、比較的福音書のたとえ話は、イエスが民衆に話したのももあり、神の教えの本質を具体的に分かりやすく伝えていきます。それを、ほぼそのまま用いることのできるものもあり、意味のとりかたも、読み方によって多様に解釈できるすぐれた教材だと思います。テキストそのもののもつ力に頼って、それを信頼しながら子どもたちに聖書のお話をさせていただければよいのではないのでしょうか。

三つ目は、日常の保育の中で子どもたちがキリスト教に触れる機会をどうもたせられるのかです。ここで皆さんに問いたいのは、「キリスト教に触れる」とは、どんな状況、どんな場面なのでしょう。私がいた舞鶴幼稚園では、食事の前のお祈りや運動会、遠足等、行事の前に小さな礼拝をしたりします。礼拝の時には聖句を暗唱したり、賛美歌を歌ったり、お祈りをしたりします。それは、キリスト教保育では当たり前の日常であり、つねに神様に見守られていることを自覚させる機会となります。この質問は、それ以外の場面でキリスト教を感じることを意味していると思います。どうでしょうか、子どもの会話の中に、「神様」という言葉がでてくることはありませんか。その時、保育者はどんな言葉で答えましたか。一つの例をここで紹介したいと思います。これは、他の園でのエピソードです。

自由遊びの中で死んでしまった虫を子どもたちが持ってきました。

「先生、土に埋めてあげようよ」

というので一緒に行きました。終えてすぐ行こうとした私に、

「先生、お祈りして」

と子どもたちから自然に声があがりました。このとき、子どもたちの中にしっかりと「神様」がいるのだな、と感じました。

礼拝だけではない、すべてがキリスト教保育の上に立っていると感じた瞬間でした。

(東京、M 幼稚園 バプテスト保育連盟研修会 2010 年 8 月 19 日アンケートより)

キリスト教保育は、礼拝が基本にある保育です。その意味で、保育全体が礼拝、つまり神様との関係を確認する機会に満ちています。保育の中で、他の活動と区別された、「聖なる時」として行われる幼児礼拝があります。それとは別に、「生活そのものが礼拝」と見なされる場合が私はあると考えています。聖書によれば、本来礼拝とは、「(自らの) からだを、神によろこばれる、生きた、聖なる供え物としてささげる」ことです。(ローマ 12:1) このことをやや大きく解釈するならば、神様に喜ばれるように生きること自体が礼拝している行為になるでしょう。神学的な難しいことは私にはわかりませんが、子どもたちが、「先生、お祈りして」といった時、彼らの中には確実に神様の存在があり、死んでしまった虫たちの命が天国にいくように願っていたのだと思います。子どもたちの神を思う心に、逆に保育者は気づかされ、祈りへと促されたのでした。

私は、保育者が子どもたちをキリスト教へと導くこともあると思いますが、ノンクリスチアンの保育者だからこそできる部分もあるのでは、と思います。それは、予備知識がない分、かえって何物にもとらわれず、素直に、率直に子どもたちの純粋な信仰に気づくこともできるのではないかと考えます。すでに信仰を持ったクリスチアンが見逃しがちな、素朴でささいな言葉や行為の中に、深い神様への思いが隠されているのです。

これまで、舞鶴幼稚園のノンクリスチアンの保育者からの疑問に答える形

で、ノンクリスチャンの先生方の課題について、対応の仕方を説明してきました。ここで、簡単にまとめてみます。

ノンクリスチャンであっても、キリスト教シンパとして自覚できれば、キリスト教保育は実践できること。そして、聖書の理解は難しいけれど、たとえば話など、テキストそのものをそのまま使えるような題材を用いて、聖書の言葉の力に頼ること。そして、生活の中に神様を感じる機会があること、それは子どもたちが気づかせてくれることがあること。この三つです。

さて、最初の方で、私は「クリスチャンになりさえすればキリスト教保育ができるほど、保育は甘くない」と申し上げました。次のテーマは、キリスト教保育の専門性についてお話します。

2. キリスト教保育の専門性について

キリスト教保育の専門性のお話の前に、保育者の役割についてまず確認しておきたいとおもいます。キリスト教保育者の役割とは何でしょうか。昔は、「幼子をキリストへ」のスローガンのもと、キリスト教信仰を育むことがミッションだった時代がありました。キリスト教保育者は、当然クリスチャンが前提だったころです。1989年の指針では、まだ保育者が子どもの信仰の成長を支える立場にたっていましたが、それが、2000年のキリスト教保育指針では、キリスト教保育が、幼児と保育者がともに作り出す保育へとスタンスを変えました。おそらくそのころから、ノンクリスチャンの保育者が半分以上を占めてきた頃かと思います。保育は、言うまでもなく人間の土台を作る仕事です。保育者は、子どもたちの親に代わって、園にいて子どもたちを預かっている時間は、まさに土台を作っている仕事に携わっています。

キリスト教保育は、「神の言葉を土台とする保育」です。先のキリスト教保育アンケートでは、ノンクリスチャンの保育者は誰もこの項目をキリスト教保育の特色に挙げませんでした。園は、人間の土台づくりの環境を備えていなければなりません。たとえ、新築のピカピカの設備の園であったとしても、きちんと管理され、安全と安心を子どもに提供できていない環境は土台づくりにはふさわしくありません。見た目のハードウェアだけではなく、保育者たちの行

動や言葉は、園児たちの心を造る環境であり、ソフトウェアなのです。これは、4年前に、キ保連の「キリスト教保育」3月号にのせた内容ですが、言葉は、園児たちの心を造る環境を構成するとともに重要な役割を占めていると考えています。私は人格は、対話を通じて形成されると考えています。園児たちの周りに飛び交う言葉が、もし乱れているならその乱れもそのまま園児に吸収されます。いいものも悪いものもすべて「スポンジ」のように吸収してしまうのです。良い言葉は、人を生かし、悪い言葉は人を傷つけ、心をゆがめさせます。言葉が乱れていると、人格も乱れて形成されます。誤解していただきたくないのは、言葉さえよければよい、と言っているものではありません。言葉は、心の表現なのです。心と言葉は、相互に影響し合いながら互いを構成します。子どもたちの心は柔らかく、柔軟で、ナイーブです。体と心はともに成長します。言葉も成長と共に増え、いろいろな心の状態を表現できるようになります。神様の言葉と共に成長していくのが、キリスト教保育です。園の中で交わされる園児たちの会話、保育者との会話によって、子どもたちは成長し、そして保育者も成長していきます。そして、キリスト教保育者は、神の言葉を土台としつつ、子どもたちの人間としての土台作りの役割を担っているのです。

私は、キリスト教保育の専門性は、特に言葉に関して活かされると考えています。その専門的な技術、もしくは技法 (Arts) が、私は少なくとも三つあると考えています。それらは、「祈る」「賛美する」そして「語る」です。

「祈る」ことは、神様との対話であり、基本的には個人の自由な思いを伝えてよいものだと思います。けれども、保育の場面で、子どもたちの前で祈ることと個人的に神に祈ることとは、やはり違いがあります。イエスが弟子たちにお祈りの見本を「主の祈り」(マタイ6章、ルカ11章)を通して示したように、誰に向かってどのように祈るのかは、ある種の形式があります。その形式を守って祈る技術を習得することが、キリスト教保育の専門能力の重要な一つなのです。その「祈る」技術は、子どもの前で、神様への「お手紙」として必要な形式をマスターしていることです。神様への呼びかけ(例、天の神様～)、

感謝（例、～を有難うございます）、お願い（例、どうか～してください）、宛名（例、イエス様のみなによっておささげいたします）、結び（アーメン）などの要素を含むことが望まれます。私が以前短期大学でキリスト教保育を教えていた時、学生達は、実習に行く前に、このお祈りの方法を一生懸命練習していたことを思い出します。

「賛美する」技術は、オペラ歌手のようにうまく歌うことではありません。子ども向けの賛美歌や聖歌を知っていること、メロディーや歌詞に親しんでいることです。ベートーベン、ヘンデル、バッハ、メンデルスゾーン等、有名な作曲家の曲を聴き、メロディーに親しんでいることは、娯楽やリラクスのためだけではなく、作曲家の心の底にある信仰に触れる経験でもあります。そして、言葉やメロディーの美しさ、心地よさを園児に喜びをもって伝えることが大切です。自宅にピアノがなく、賛美歌の伴奏の練習に苦労されている先生方も多いと思います。キリスト教保育は、音楽をととても重視しています。賛美歌の歌唱指導に力を入れる傾向は今でも強いのではないのでしょうか。幼児礼拝では、美しい和音や旋律にのせて、神様への賛美の言葉が歌われます。たとえ、子どもたちが、言葉の意味をよくわかっていなくても、楽しそうに大きな声で歌うことで、メロディーと歌詞が体の中に入り込みます。頭で理解するのではなく、歌いながら体で神様への賛美を表現し、言葉やメロディーを体得していくのです。メロディーが体の中に残っていると、大きくなってから何かの拍子にその賛美歌を口ずさんだり、同じ曲をどこかで聞いたときに、ああそういえば、と思い出したりすることもあるでしょう。体の中に音を持つ、言葉を持つことは、とても重要です。何かの拍子に、その言葉や音に反応し、思い出すことができるからです。この能力や感性は、幼い時期にしか発達しません。賛美を通して、音や言葉への感性を伸ばすこと、これは一般の保育にも共通して重要なことですが、キリスト教保育では、神様を感じることに、言い換えれば「神様への感覚」を育てる大切な訓練だと思っています。その意味で、保育者自身が賛美することの楽しさ、喜びに十分に浸ることが大切だと思っています。

最後に「語る」技術です。一般的に素話の技術と言えますが、キリスト教保育で重要なのは、聖書物語を題材にしたものです。賛美歌と同じように、聖書

に親しんでいるか、園児にふさわしいお話は何かなど、幅広い知識と経験が必要とされます。教材としてあるものを、マニュアル通りに扱っても表面的になってしまい、うまくいきません。先ほど申したように、歴史的・民族的背景、文化や慣習などの知識を習得しておかねば、うまく「語る」ことはできません。内容を理解し、保育者が共感してはじめて園児の顔を見ながら語りかけることができるのです。子どもの保育に関する技能や知識は、一通り養成校で学んできたと思いますが、キリスト教や聖書の知識は、日々の学びを意識的に行わなければ身につくわけではありません。教会と園が一体であり、教会の「教育的機能」がキリスト教学校であった半世紀以上前の時代ではありません。教会と組織的に分離され、人の交流も少なくなってしまった現代、保育者は自らキリスト教の学びを始めなければならないのです。語る技術は、そのような学びに裏付けられたキリスト教の教養に左右されるのです。

これまで、キリスト教保育の専門性について、特に、キリスト教保育の技術を磨く（祈る、賛美する、語る）について説明してきました。この内容は、すでに2015年キリスト教保育誌2月号に掲載してありますので、後日参照していただければ幸いです。繰り返しますが、単純にクリスチャンになれば、キリスト教保育ができるわけではないことが、これでご理解できたのではないのでしょうか。教会に導き、クリスチャンとしての信仰をもつように働きかける仕事は、あくまで牧師先生の仕事です。私には許されない領域です。キリスト教保育の現場で働くための、専門的能力は、礼拝や聖書理解に欠かせない知識や技術によって伸ばすことができます。これは、信仰をもっていない保育者であっても可能です。技術を伸ばした先に、私は子どもたちから神様の存在や神の働きに気づかされる機会があるのではないかと思います。次に、その話をしたいと思います。

3. 幼子からキリストへ

クリスチャンの保育者が多数派を占めていたころは、キリスト教保育のローガンは、「幼子をキリストへ」と言われていました。幼児はキリスト教信仰をもつことができるのか、1950年代後半では、否定的な意見もありました。

大人になって物心がついたときに、キリスト教教育をすればよい。それまでは、日曜学校などでキリスト教を教えることは不要である。といった極端な「日曜学校不要論」（「私はなぜ日曜学校を廃止したか」赤岩栄、福音と世界 1956年11月号）までであったのです。しかし、1960年代になって、幼児の信仰についての心理学的な研究が進み、発達段階に応じて聖書の正しい理解に基づき、信仰が育つことが指摘されました。（日本キリスト教団宣教研究所第三分科会『キリスト教幼児教育の原理』日本基督教団出版部 1962年）

信仰の発達段階については、1980年代よりジェイムズ・フォーラーの理論が日本でも紹介されました。彼は、リチャード・ニーバーやパウル・ティリッヒらの神学からも影響を受け、ピアジェやコールバーグの理論に触発されて信仰の発達理論を構築しました。詳細は、奥田和弘先生の『キリスト教教育を考える』（日本基督教団出版局 1990年）に掲載されていますので、ここでは乳幼児に関わる部分だけ紹介いたします。

彼は、信仰の発達段階を全部で7つの段階に分けてモデル化しています。0～4歳までを段階前、4～7歳を第1段階、7～11歳を第2段階、12～18歳を第3段階、18～30歳を第4段階、30～40歳を第5段階、40歳以上を第6段階と位置付けています。

前信仰段階（0～4歳）は、信仰が未分化な状態です。感覚器官に頼った運動をし、言葉は十分に発達していません。この時期は、信仰の基礎となる信頼、勇気、希望、愛などを感覚的に知っていく時期だと言われています。親や保育者など、まわりの大人たちに見守られながら、安心して自分が受け入れられ、配慮されている存在であることを感覚的に知ることが、信仰の基礎になるのです。

第一段階（4～7歳）は、直感的・投影的信仰と言われています。この段階では、子どもは、神というイメージをもって世界を理解しようとします。そのイメージは、直感的で具体的なものです。例えば、神はサンタクロースのおじいさんとして考えられます。子どもたちの周りの大人との関係が、そのまま神との関係を形作ります。この時期に形成されたイメージは、その後長く、その子どもの信仰理解に影響を与えるものとなります。

第2段階以降は、割愛しますが、概略だけ申し上げますと、信仰は、子どもを取り巻く社会の習慣やそこで語られる物語をそのまま受け入れ、さらにシンボルを理解できるようになり、社会のルールやあるべき事柄を自分で選択し、決断して責任を持つようになります。そして、信仰が異なる人を否定せず、自分の信仰をまもり、さらに普遍的な在り方を求めることができるようになります。

従来の幼子をキリストへ導く役割を持ったキリスト教保育者は、自分の信仰に照らし合わせて、幼児を導く責任感に満ちていたのではないかと、思います。しかし、1970年代以降、日曜学校に通う子どもが少なくなり、1990年代にはクリスチャンの保育者が半数を割り込むようになると、「幼子をキリストへ」導く保育者のイメージは後退していきました。ご存知のように、子どもの信仰を導くのは、本来保育者ではありません。神様です。しかし、保育者自身も神様に導かれて信仰の歩みをすすめる、という意味で「幼子と共にキリストへ」にかわっていったのであろうと私は考えます。

幼児の信仰は、しばしばアニミズム的だと言われます。アニミズムとは、動物や植物、それ以外の無生物にも靈魂（アニマ anima）がやどっているという世界観です。宗教学的に観れば、最も原初的な形態だそうです。世界を神様によって造られた存在と考えるユダヤ・キリスト教的世界観とは異なりますが、幼児の世界では、神様は動物や植物の中に存在することも珍しくありません。レギーネ・シントラーの『希望の教育へ』の中には、子どもたちの豊かな神のイメージが紹介されています。ゴットフリード・ケラーの『緑のハインリッヒ』を彼女は本の中で紹介していますが、そこに登場する塔の上の金色に輝く風見鶏や、絵本の中のトラ、ゲルハルト・ハウプトマンの『踏切番のティール』の中の、松の木を素早く移動するリスなど、それらは子どもの目から見れば神のイメージになると言います。クリスチャンの先生でしたら、「神様は動物ではありません。」とつい言うってしまうかもしれないですね。ノンクリスチャンの先生は、いかがですか。「へー～！面白いね！」とおっしゃるかもしれません。私は、この受け止め方の違いに注目しています。キリスト教の知識が大切だ、と先ほど申し上げたばかりですが、「正しい知識」を子どもに押し付けてはい

けません。大切なのは、子どもの信仰を育む基礎には、信頼と驚き、不思議だ、と思える心の空間が必要なのです。

冒頭で申し上げましたが、模範解答を最初に与えてしまうと、自分で考えなくなってしまいます。一緒になって、「なんでだろうね〜?」と不思議に思うこと、それが大切なのだと思います。神様は、サンタクロースのような姿をしていない、と言ってしまうと、子どもの想像力が否定されてしまいます。見えない神様を見える姿に想像する能力を育てることは、子どもにとってとても重要です。いきなり抽象的で難しい概念を子どもは習得できません。そこで、最初は、具体的で直感的なものによって、神様を何とか把握しようとするのです。私が勤めていた幼稚園のノンクリスチャンの教師は、聖書のお話をした後、園児の頭の中に、神様が「スッと入ってくる」ことにとっても驚いていました。保育者である自分は信仰がないのに、子どもたちの方に信仰が育まれていることに、ある意味で感動したのです。「スッと入ってくる」心の空間をつくるのが保育者には大切だと思います。

あるキリスト教学校の宗教主事の先生が、キリスト教学校教育同盟の新聞のコラムで児童文学研究者の松岡享子さんの「サンタクロースの部屋」という本の一部を紹介していました。少し長いですが、引用します。

「子どもたちは、遅かれ早かれサンタクロースが本当は誰かを知る。知ってしまえばそのこと自体は他愛のないこととして片付けられてしまうだろう。しかし、幼い日に心からサンタクロースの存在を信じる事は、その人の中に、信じるという能力を養う。私たちは、サンタクロースその人の重要さのためではなく、サンタクロースが子どもの心に働きかけて生み出すこの能力の故に、サンタクロースをもっと大事にしなければならない。」
サンタクロースその人は、いつかその子の心の外へ出て行ってしまうけれど、サンタクロースが占めていた心の空間はその子の中に残り、この空間がある限り、人は成長に従ってサンタクロースに替わる住人をここに迎え入れることができるのだそうです。この心の空間、つまり目に見えないものを信じるという心の働きは、人間にとってとても大切なものです。それ

は、その人が生きていく中でその人を内側から生き生きと生かす力となるはずです。(川原田玲子 [夙川学院中学・高等学校宗教主事] キリスト教学校教育 12 709号、2017. 12. 15)

サンタクロースは神様ではありません。ご存知の通り、4世紀の現在のトルコ(小アジア)のミュラの司教であったセント・ニコラウスが子どもの守護聖人であった、との言い伝えがアメリカにわたり、子どもたちにプレゼントをする習慣と結びつき、さらにコカ・コーラの宣伝で世界的にそのイメージが定着したものが、サンタです。私は、父が園長をしていて、クリスマスにサンタの恰好をして園児たちにプレゼントを配ることを幼いころから知っていました。教会や幼稚園の裏事情を知らながら成長していったのです。いつの間にか、世の中を斜に構えて、シニカルにみるようになってしまいました。信仰の発達段階から外れて、神様を受け入れる心の空間を作ることもなく育っていったのかもしれない。けれども、高校になり、倫理学の授業を受け、哲学の難しい概念を学ぶうち、自分の中に知らないうちに、神を受け入れる空間があることに気づかされました。知らないうちに、体の中に蓄積していた聖書の言葉や賛美歌、そして聖書物語の挿絵と高校で学んだ抽象的な概念が結びついたのです。もう逃げられない、神様から逃げることはできない、とそのとき観念しました。私が高校2年の時でした。キリスト教保育の成果が、10数年たって現れたのです。

ノンクリスチャンの先生方に、改めて申し上げたいことは、自分が子どもたちを導かねばならない、と焦ることはない、ということです。逆に、クリスチャンの先生方には、決して先生方が子どもたちをキリストへ導いているわけではないことを忘れないでほしいと思います。キリスト教保育指針にもありますが、「保育者は、子どもを保育する立場でありながら、実は子どもと同じように、神によって受け入れられている存在でもある」からです。保育者も「神の愛によって生かされている者として、子どもと同じ地平に立って」います。「神に愛されていることを知ること」これが、すべての出発点です。

今日の社会では、教育でも保育でも、能力を高めることに躍起になっています。自分の能力を高めること自体は否定的に捉える必要はありません。ただ、それを人と比較したり、競争させたりして序列をつけることは、人の心を貧しくしてしまうでしょう。土台づくりを私たちはしているのであって、土台の下に根を張っている子どもたちに、根っこを引き抜いて長さを競うことほど、無謀なことはありません。「成長させてくださるのは神」(コリント I, 3:6) からです。ノンクリスチャンの保育者も、キリスト教保育の土台を園児たちと一緒に作っている最中なのです。キリスト教保育の技術は大切ですが、信仰は技術程、目に見えるものではありません。信仰は能力ではないからです。理解力でもありません。ただ、自分の存在を神様にゆだねられるかどうか、その決断なのです。その見本になるのは誰でしょうか。イエスの弟子たちでは少なくともありませんでした。イエスは、「子供のように神の国を受け入れる人であれば、決してそこに入ることはできない。」(マルコ 10:13-16) と言いました。子どもはあくまでも比喩的表現です。ただ、子どものような信仰が実は「自分をゆだねる」お手本となるのです。

保育者は、子どもを愛することを心掛けています。他方、子どもから自分が愛されていると感じることはありますか? 「先生のこと大好き!」と声に出していつてくれる園児は分かりやすいですね。けれども、そう多くはないかもしれません。赤ん坊も、子どもも実は、親、保育者を愛しています。信頼しています。頼っています。多くの愛を大人は乳幼児から与えられているのです。愛する行為とは、自分の存在を預け、相手の存在を受け入れることです。子どもは、言葉以上に、自分の全存在をかけて大人に向かってきます。大人はそれをしっかり受け止めることができているのでしょうか。

イエスは、弟子たちに追い払われようとしていた子どもたちを受け入れました。そして、大人たちを諭したのです。子どもの姿に愛を与え、受け入れる手本を見出すように教えたのです。マルタとマリアの話でもそうです。能力の高い姉のマルタは、イエスの接待の準備で、てんてこまいでした。彼女は、いろんなことによく気が付き、家事の能力も高かったのだと思います。他方、マリアは、体が弱かったのか、イエスの話を静かに聞いて座っていました。マルタ

がイエスに妹が手伝いをするように言って下さい、と要求します。この気持ち、わかりますね。「私もイエス様のお話、聞きたいのに！」ちゃっかり座って手伝いもしない妹を妬ましく、うらやましく思ったのでしょう。イエスは、マルタをなだめ、マリアは大切な方を選んだのだ、と言って論じます。(ルカ 10: 38-42) マリアの態度にも、イエスを愛する姿勢が見られます。そして、イエスはそれを喜んだと思います。子どもは、本質を見抜く力があります。社会の様々な状況の中で、何が一番大切なことなのか、鋭く指摘します。マルタは、接待の準備に心を奪われ、イエスの話は二の次でした。仮に、イエスへのおもてなしが後になっても、イエスはマルタをとがめなかったでしょう。大人は、子どもと比べて能力が高く、周りの状況が把握できるので、処理しなければならない情報に振り回されてしまいます。時には本質を見誤ります。子どもは、知識も能力も大人より当然ながら劣ります。それだからこそ、一番大事なものに気持ちを集中できるのです。

キリスト教保育指針では、一番大切な神様の愛に気づくためには、「子どもから保育者へ」の視点が重要であることを教えています。(p.21)

保育者は、保育の中で子どもに愛を与えていると思いながらも、逆に、子どもを通して神の愛を感じ、受け取ることが折に触れてある。子どもの笑顔や元気な様子、毎日の様々な変化や成長は、保育者の励みとなり、仕事の疲れを癒し、心を満たす源となる。子どもは、本人の自覚なしに、神の導きに生かされていることを生活の中で表している。子どもの明るさや活発さ、笑顔の背後に神の恵みを見出す保育者の感性は、子どもとの関わりを豊かなものとする。子どもは、自らの姿を通して神の愛を大人に気づかせる役割を果たしている。

「幼子をキリストへ」というかつてのキリスト教保育のスローガンは、現在「幼子と共にキリストへ」となっています。(キリスト教保育連盟キリスト教保育誌表紙裏面記載) 私は、個人的にですが、「幼子からキリストへ」の時代が遠からずやってくると思っています。子どもは神ではありませんが、人間と

して純粋な部分を隠さずに表に出しています。天地創造の物語に、人は「神に似せて造られた」神の似姿であることが描かれています。(創世記1:26-27) 幼稚園の創始者フレーベルは、「子どもに生きよう!」といました。ルソーは、「万物をつくる者の手をはなれるときはすべてよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる。」とっています。近代の思想家たちは、子どもの中に神の創造の業を見ていたのだと思います。

私がこのようなことを言うと、自分勝手にいたずらばかりして、大人を困らせる子どもの中に、一体どうやって「神のわざ」をみたらいいんですか!と怒り出す保育者もいることでしょう。忘れてはいけません。神の愛は、保育者である皆さんにも働いています。その愛を受け取っていると感ずることで、子どもたちに注がれている神様の恵みや愛に気づくことができると私は思います。

おわりに

ノンクリスチャンの保育者としてどうあるべきか、この講演を閉じるにあたって改めて振り返ってみたいと思います。私は、三つのことを申し上げました。

- ①キリスト教保育の技術を磨く。祈ること、賛美すること、そして、語ることです。
- ②キリスト教シンパとしての自覚をもつ。
- ③子どもたちから神の愛を感じる。これは、聖書のルカによる福音書18章17節にあるように、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」が基になっています。

どうか、これらのことを頭の隅において、子どもたちの保育にあたっていただきたいと思います。子どもたちは、未来の希望です。信頼と喜びと希望に満ちています。最後に、レギーネ・シントラーの著作『希望の教育へ』(深谷潤訳 日本キリスト教団出版局 2016年)に掲載されている、アメリカのあるおとぎ話「スワベド村の小人たち」を紹介して私の講演を閉じたいと思います。

昔々、地上に小人が生活していました。彼らの多くは、スワベド村に住ん

でいて、スワベドダースと名乗っていました。彼らはとても幸せでした。大きな口を開けて笑いながらあちこち走り回り、誰にでも挨拶しました。スワベドダースが一番好きなことは、温かく柔らかい毛皮を互いに贈ることでした。彼らは皆、各自の肩に袋をかけていました。それは、柔らかい毛皮でいっぱいでした。そこで、スワベドダースは誰かに会うたびに、互いに毛皮をプレゼントするのです。暖かく柔らかい毛皮をお互い贈るのは、とても素敵なことです。他の人に「彼は特別なんです」、というとき、それは、「私は君が好き！」と言っているのです。同じように素敵なことは、他の人から毛皮をもらうことです。それに頼ずりすると、どんなに暖かく、フサフサしているかわかります。そしてプレゼント用に毛皮をそっと、やさしく袋に入れるときは、とっても素敵な気分になります。だれかがあなたに毛皮を贈ると、あなたは人から認められ、愛されていると感じます。そして、また何か良いこと、素敵なことを同じようにしたいと思うのです。スワベドの小人たちは柔らかく、暖かい毛皮をあげたり、もらったりします。彼らの共同生活は、全く不安がなく、とても幸せで楽しいものでした。

この小人たちは、誰も自分の毛皮がなくなることに不安を持っていませんでした。緑色をしたコーボルト（いたずら好きな妖精）が、たった一人のスワベドダースを不安にさせるまでは。そして、すぐに将来への不安が彼らの間に広がりました。小人たちは、失望し、そして病気になりました。かれらは、愛と希望のシンボルである暖かく柔らかい毛皮を、それまでとは打って変わって、お互い隠さなければならなくなったのです。最後の一人が死ぬまで……。

子どものように神を受け入れるということは、この物語の小人たちのように、何の不安もなく、暖かく柔らかい毛皮をお互いに贈ることなのだと思います。

(上記は、2019年3月29日 今治めぐみ幼稚園園内研修会の講演をまとめたものである。)